

## 審査の結果の要旨

氏名 齊藤 崇徳

わが国のキリスト教系大学は決して親和的とは言えない環境の中で成立し、今日に至るまで拡大と発展を遂げてきた。本論文の目的は、その生成と存続のメカニズムを、従来のような政策的・経済的な要因ではなく、大学組織の宗教的適応という文化的側面に着目して分析することにある。これは、大学という教育に関する公式組織が異質な文化の一つである宗教にどのように関わり、独自性をどう確立・維持してきたのかというプロセスを解明しようとするものであり、これまでの高等教育研究ではほとんど看過されてきた視点である。その分析に当たり、本論文では新制度派組織論に依拠して組織フィールド（複数の組織とそれらを取り巻くアクターというミドルレベルでの集合体、界）と制度ロジック（フィールドを構成する実践、象徴）の概念を援用しながら、その多面的・複層的な適応のあり方が詳細に分析される。

本論文は3部構成、全15章から成る。第1部では新制度派組織論を中心に高等教育に関する理論と適用する分析枠組みの検討が、また第2部ではキリスト教会とキリスト教思想という2つの宗教的適応の様態とキリスト教系大学の内部組織の構造の分析が、さらに第3部では戦後変動期における宗教的適応のあり方とその変容が詳細に考察される。具体的には、第1章、2章において研究目的、先行研究領域での位置づけが整理され、第3章ではキリスト教系大学の宗教的適応に対する組織フィールドと制度ロジックという概念の援用可能性、第4章では Burton R. Clark および John W. Meyer の文化概念により大学制度外部に存するキリスト教の位置づけが考察される。

第2部の第5章では戦前期に教会から分離し戦後に世俗化の基盤となるプロセスが、また第6章ではキリスト教系大学が他の宗教系大学よりも宗教制度と強い関連をもつといった構造的特徴が分析される。さらに第7章では、学校法人の寄附行為の分析を通じて、教会から独立した大学の経営組織構造におけるキリスト教的な制度ロジックの実体化の在り方が、第8章・第9章では聖職者養成と神学部に着目することで、大学の教会への適応とその多様性が分析される。

以上を踏まえた上で、第3部の第10章では、占領期における組織フィールドの再編と新たな制度ロジックの駆使が考察され、第11章で国際基督教大学の成立を事例にその具体的プロセスが解明される。第12章では、1960年代までのキリスト教学校教育同盟に着目して、教会への宗教的適応が減退して大学拡大と経営において葛藤が生じてきたことを、さらに第13章では大学紛争期に教会と思想両面でキリスト教に結びついていることへの根底的な批判を経て、新たに進行することになった宗教的適応のロジックが分析される。そして第14章では、現代の認証評価資料の分析から、キリスト教そのものではなくその理念を持つこと自体が大学の社会環境に対して適合的になってきたことが示される。終章である第15章では、以上の分析を総括しつつ、本論文で援用した方法論と新たな知見について、改めてその意義が考察される。

本論文は、従来の法制的・経済的な解釈を主とした高等教育研究に新たな理論と方法論を提供し、また大学組織の文化的現象への適応プロセスを詳述することで新しい大学の歴史叙述を企図することにも成功している。よって、本論文は博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい水準にあるものと判断された。